

趣味と道楽

新居浜 小野 基道

辞典には趣味は楽しみでする上品な好み、道楽はその道にふけて楽しむこと、とある。趣味は平面的普遍的理性的で、その人の品格を高める。道楽は深く孤独的で、感情に負けて身を亡ぼすおそれもある。俳人山頭火など極道者で、心の疼く香りがある。昔は道楽といえは飲む、買う、搏つ、で言行ともによくない。今はよく道楽の末は小唄、お茶、ゴルフとかいう。みな自由と自主性を持ち、入り易くて深い。小唄でも自らの即興を歌い、その詞その節に老妓の三味がついていく。いや自らとる中棹の爪弾に没入するなら道楽だが、今様の師匠の真似をし、お伴の糸音に気をつかう、人に聞かせたい喉の美声ではねえ。お茶だって、自ら茶杓を削り、碗を焼き、ご馳走を作る一期一会のお茶事でなくでも、独り点てた一服のお茶に天

地の慈悲を知れば道楽。免状を貰い心の通じぬ道具をみせたがるのは反って邪道か。ゴルフは知らない。板前の作った旨いものをたべ歩くのは食通。自ら釣りし自ら培ったものを自ら庖丁をとって、食物と人間の一体の愛情を楽しむのは食道楽。ロータリーも大方の人たちは物持ちの道楽とみる。それでよい。天職といい、奉仕、サービス共に神仏の心に通ずる道、その道を楽しむ人の心に価値がある。私は時折、内村鑑三の「生命に関する真の智識はただ生命を生きることによってのみ得られる」とか、平常心是道とかを口にする。

ポール・ハリスは私たちのロータリーを創めた。ロータリーは私たちのポール・ハリスを作った。日本人は元来奉仕の道を楽しむ。奉仕、奉仕と鳴くツクツク法師よりも鳴かぬホタルの妙好人を求め。ロータリーの道を楽しみ、道を極めた多くの先輩が私たちに感激と希望を惜しみなく支えてくれた。さて盲者のこの放言道楽へ極道の一喝を与え給え。(内科歴)